

令和8年度 全国学力・学習状況調査結果の分析

豊後大野市教育委員会

1. 全体結果より

市としての目標値……平均正答率において、全国平均を上回る

(1)小学校

○国語、算数ともに、目標値である全国平均正答率を下回った。

(国語：－1.9 ポイント) (算数：－2.4 ポイント)

(2)中学校

○国語、数学ともに、目標値である全国平均正答率を下回った。(国語：－1.9 ポイント)

○特に数学において全国との差が大きい。(数学：－6.4 ポイント)

・英語3技能 平均 IRT スコア 476

(3)全体的総括

○小中ともに、昨年度の「大分県学力定着状況調査」と経年比較しても、同じ傾向であり、引き続き取り組みを強化していく必要がある。

○小学校では、無回答率が低く、また「記述式」の正答率が高いことから、粘り強く問題に取り組んでいるといえる。

○中学校では、特に数学の「B 図形」「A 数と式」の領域において、数理的性質や意味の理解、条件を理解したり筋道を立てて考えたりする力が低い。

○小中学校ともに、授業改善、指導内容や指導方法の改善を行う必要があることが伺える。※教師が教える場面と子どもが考える場面を明確にした単元構成の工夫。

○「読むこと」に比べ、「聞くこと」「書くこと」の理解度が低い。読書の楽しさへの工夫等を実施しつつ、「聞くこと」「書くこと」は、英語科の授業、「スキルタイム」等で重点的に取り組む必要がある。

○学校間での差が明確にある。学力向上に向け、市としても小中一貫教育校の特徴をいかしつつ、また各校、各学年に応じた授業改善を実施していく必要がある。

○家庭学習の習慣をつけ、学習時間の確保が必要である。平日に4時間以上、スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレット、ゲーム機、テレビ等でSNSや動画視聴などを行っている児童生徒が3割弱いる実態がある。

2. 各教科の概要

(1) 小学校について

①国語 ア. 領域ごとの全国平均正答率と市平均正答率

観点	市正答率	全国正答率
A 話すこと・聞くこと	65.3	65.8
B 書くこと	45.4	45.7
C 読むこと	66.1	65.9
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	59.8	66.8
(2) 情報の扱い方に関する事項	53.1	52.3
(3) 我が国の言語文化に関する事項		

◇正答率が全国平均を上回っている問題 (5/13)

◇無回答率が全国平均を下回っている問題 (12/13) 好調

イ. 問題形式ごとの全国平均正答率と市平均正答率

区分	市正答率	全国正答率
選択式	60.3	61.9
短答式	53.6	62.6
記述式	57.1	54.9

②算数 ア. 領域ごとの全国平均正答率と市平均正答率

観点	市正答率	全国正答率
A 数と計算	57.7	61.1
B 図形	54.7	55.3
C 測定	71.9	78.1
C 変化と関係	34.9	41.1
D データの活用	50.9	48.6

◇正答率が全国平均を上回っている問題 (5/16)

◇無回答率が全国平均を下回っている問題 (16/16) 好調

イ. 問題形式ごとの全国平均正答率と市平均正答率

区分	市正答率	全国正答率
選択式	52.9	56.0
短答式	57.0	59.7
記述式	49.7	48.5

(2)中学校について

①国語 ア. 領域ごとの全国平均正答率と市平均正答率

観点	市正答率	全国正答率
A 話すこと・聞くこと	61. 1	63. 9
B 書くこと	63. 7	67. 4
C 読むこと	59. 3	59. 7
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	62. 2	63. 0
(2) 情報の扱い方に関する事項	60. 8	70. 4
(3) 我が国の言語文化に関する事項		

◇正答率が全国平均を上回っている問題 (4 / 15)

◇無回答率が全国平均を下回っている問題 (8 / 15)

イ. 問題形式ごとの全国平均正答率と市平均正答率

区分	市正答率	全国正答率
選択式	69. 8	72. 7
短答式	55. 6	55. 8
記述式	43. 0	45. 5

②数学 ア. 領域ごとの全国平均正答率と市平均正答率

観点	市正答率	全国正答率
A 数と式	61. 8	67. 8
B 図形	37. 9	48. 7
C 関数	53. 1	54. 8
D データの活用	50. 6	53. 5

◇正答率が全国平均を上回っている問題 (3 / 16)

◇無回答率が全国平均を下回っている問題 (4 / 15)

イ. 問題形式ごとの全国平均正答率と市平均正答率

区分	市正答率	全国正答率
選択式	54. 7	59. 3
短答式	57. 9	64. 2
記述式	34. 2	39. 1

3. 今後の取組について

(1) 目標達成に向けた重点的取組について（学力向上）

2026年度は、現状の課題を整理し、取組を整理した。調査結果の分析とともに、今後点検していくとともに、1学期を振り返り、2学期に向けて具体的な取組内容を提示する。

〈重点〉

- 1 「たのしい学び場」の充実(学びの環境整備)
- 2 「確かな学力」の育成(学習内容の習得)
- 3 「わかった授業」の創造(教職員の指導力向上)

① 「たのしい学び場」の充実(学びの環境整備)について

集団としての目標の共有と満足感、達成感のある取組みの充実をはかる。また、学ぶ環境ができているかを見直し、児童・生徒の居場所があり、落ち着きと安心感のある授業構築をすすめていく。

ア. 「学びに向かう」集団づくり

- a. 発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。
- b. 学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。
- c. 一人ひとりが大切にされる授業（認める、褒める）の意識化

② 「確かな学力」の育成(学習内容の習得)について

基礎となる「知識・技能」が不足していることは、今回の調査で明らかである。中学校においては、付随して「思考力・判断力・表現力」も不足している傾向がみられる。

ア. 単元構成を意識した授業展開の実施

- a. 単元で付けたい力の明確化と、実態に即した単元計画の立案
(思考力・判断力・表現力の時間、習得の時間などの計画)
- b. 学級実態や個に応じた学習形態の工夫

イ. 9年間の発達段階に応じた基礎・基本の強化

- a. 聞く力、話す力、読む力、書く力、計算する力の強化
- b. 教科の特質に応じた基礎力の強化（中学部）

ウ. 各教科における言語活動の充実

- a. 「思考力・判断力・表現力」の育成
- b. 発達段階に応じ、各教科の目標を達成する手立てとしての言語活動の充実

エ. スキルタイムの実施

- a. 実態に応じたスキルタイムの実施

オ. 適切な ICT の活用

- a. 付けたい力や、単元、教材に応じた効果的な ICT の活用

カ. 家庭との連携

- a. 家庭学習の習慣化
- キ. 英語教育の推進
 - a. 校内研究等での授業研究と実践の共有
 - b. 小学校英語教育推進教員の活用・研修

③「わかった授業」の創造(教職員の指導力向上)

知識を使う経験の積み重ねが、生きて働く力と変わっていく。学んだ内容を活用する場面を設定し、単なる知識ではなく、使える力が必要となる。そのためには「わかった授業」を目指した授業改善が必要である。

- ア. UD のよさを取り入れた授業展開
 - a. 教師の話し方、発問や指示
頑張りを認め、肯定的な表現、興味を引く工夫わかりやすい発問や指示
 - b. 授業に関する約束事をわかりやすく示す
 - c. 授業のねらいに応じた学習形態の工夫（ペア、グループなど）
 - d. 「わかった」「できた」を実感できる振り返りの実施
 - e. 個別最適な学びへの対応教師が教える場面と子どもが考える場面を明確にした単元構成にする。
- イ. 「生徒指導提要の4視点」を意識した授業展開
 - a. 自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、
安全・安心な風土の醸成
- ウ. シームレス教育を基盤にした互見授業の充実
 - a. 互いの授業実践から学ぶ機会の実施

【 豊後大野市 】

令和8年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問調

1 調査結果の概要

児童質問調査

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」との問いに対して、本市では82.5%と、県平均（81.7%）全国平均（78.4%）よりも肯定的に回答したやや児童が多い。
- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」との問いに対して、本市では87.5%と、県平均（87.0%）、全国平均（85.7%）よりも肯定的に回答した児童がやや多い。
- ・「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」との問いに対して、本市では88.5%と、県平均（89.0%）、全国平均（87.3%）よりも肯定的に回答した児童がほぼ同じ割合である。

生徒質問調査

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」との問いに対して、本市では86.3%と、県平均（79.7%）全国平均（79.0%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。
- ・「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」との問いに対して、本市では92.2%と、県平均（88.4%）、全国平均（87.0%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。
- ・「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」との問いに対して、本市では95.1%と、県平均（88.6%）、全国平均（85.2%）よりも肯定的に回答した生徒が多い。

2 豊後大野市の児童・生徒質問調査の調査結果をふまえて

本市では、主体的・対話的で深い学びについて、「学びに向かう集団づくり」が重要であると考え、以下の点を中心に継続して取り組むことにする。

- ①発表の仕方やグループ学習のあり方等、授業中の過ごし方について見直す。
- ②学びに向かう姿を可視化し、児童生徒に取り組ませる。
- ③日常生活の知識と体験活動の知識、そして学習内容の知識を活用し、課題解決を図っていく。そのような思考回路の多面化(多角化)が習慣化できるよう、意図的に学習の中に仕組む。
- ④自分の考えを相手に伝える場面を多く経験させる。そのため、グループ学習でプレゼンを多く取り入れ、ディベート学習を用い、自己主張をさせる。また、発言の根拠を明確にする習慣を、すべての教科で身につけさせる。

【 豊後大野市 】

令和 8 年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

1 調査結果の概要

小学校：学校質問紙

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では 36.4% {県平均 (29.7%) 全国平均 (20.4%)} であった。
- ・「授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では 18.2% {県平均 (22.2%) 全国平均 (12.8%)} であった。
- ・「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週 3 回以上」と回答した学校は、本市では 90.9% {県平均 (62.7%) 全国平均 (51.9%)} と高い。

中学校：学校質問紙

○主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況について

- ・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では 28.6% {県平均 (30.3%) 全国平均 (19.1%)} であった。
- ・「授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか」との問いに対して、「そう思う」と回答した学校は、本市では 28.6% {県平均 (21.8%) 全国平均 (15.2%)} であった。
- ・「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか」との問いに対して、「ほぼ毎日」「週 3 回以上」と回答した学校は、本市では 85.7% {県平均 (64.7%) 全国平均 (47.9%)} と高い。

2 豊後大野市の学校質問調査の結果をふまえて

- ・「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができている」と回答した小学校が 36.4%、中学校が 28.6%という結果から、自主性を育てるために、問題解決型学習や生徒が自分で課題を設定し、それを解決するための活動を設定する必要がある。
- ・「授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができている」と回答した小学校が 18.2%、中学校について 28.6%という結果から、発言・発表スキルの向上を目指すために、ディベートやプレゼンテーションを通して、意見をまとめたり、発表したりする機会を増やす必要がある。
- ・「ほぼ毎日」「週 3 回以上」ICT 機器を使用しているという結果は、児童生徒が ICT 機器を活用して学習していることが伺える。今後も自主性や発言・発表スキルの向上につながるような活用方法を模索し、取り組んでいく。